第 26 回　東北建築賞選考報告

【作品賞部門】

選考委員長　**武澤　秀一**

１．応募作品数

・小規模建築物部門：　　4 点
・一般建築物部門　：　　29 点
　　合　計　　：　　33 点

２．選考経過

(1) 事前打合せ会議（2005 年 9 月 15 日、於；日本建築学会東北支部会議室）
応募作品の数とその内訳を確認した上、東北建築作品発表会の運営方法および東北建築賞［作品賞］の選考基準などについて事前打合せ会議を行った。

(2) 東北建築作品発表会（2005 年 10 月 1 日、於；仙台メディアテーク 7 階スタジオシアター）
　第 1 次審査（同日、於；仙台メディアテーク 7 階会議室 b）

第 16 回東北建築作品発表会において応募全 33 作品の発表が行われた。そのうち 1 点については代理者による発表となったが、発表会は全体として滞りなく終了した。時間厳守の下、熱のこもった効果的なプレゼンテーションをされた発表者諸氏に敬意を表したい。

東北建築作品発表会の終了後、会場を移し、現地審査を行う必要のある作品を発表作品のなかから選定することを目的として、第 1 次審査に入った。

あらためて選考基準などを確認した後、東北建築作品発表会における発表を基に、現地審査を行う必要のある作品の選定に向け投票を行った。

その結果、小規模建築物部門では 3 作品が選定された。一般建築物部門では 10 作品が選定された。以上の計 13 作品を現地審査の対象とすることが全会一致で承認された。

なお、現地審査は 1 作品につき 2 名以上の選考委員がこれに当たることを確認し、選定された 13 作品について現地審査の分担を決めた。

また現地審査の対象となった作品のそれぞれにつき、現地において確認すべき点を検討し、全選考委員の間で確認した。

(3) 現地審査

第 1 次審査において選定された 13 作品の現地審査は 12 月中に完了すべく鋭意、実施された。

(4) 第 2 次審査（2006 年 1 月 28 日、於；日本建築学会東北支部会議室）

第 2 次審査に当たり、あらためて選考基準などを確認した。次いで、現地審査に当たった各選考委員から報告がなされた。これに対して他の選考委員から質問がなされ、活発な応答が行われた。これらを通し、各作品についてさまざまな見地から多面的な審査が行われた。

これを経て、一般建築物部門においては、投票により東北建築賞［作品賞］該当作 2 点が決定した。小規模建築物部門においては、残念ながら今回は入賞該当作なしとの結論に至った。

また、一般建築物部門から 1 点を東北建築賞［作品奨励賞］該当作に選定した。

３．選考結果

作　品　賞　鶴岡アートフォーラム

【所 在 地】山形県鶴岡市馬場町
【設計監理】小沢明建築研究室
【施　　主】鶴岡市
【施　　工】佐工・山口・鈴木建設共同企業体ほか

作品奨励賞　秋田拠点センター　アルヴェ

【所 在 地】秋田県秋田市中通
【設計監理】日建設計
【施　　主】秋田市、秋田新都心ビルほか
【施　　工】大成建設・日商岩井共同企業体

作　品　賞　道の駅「上品の郷」
【所 在 地】宮城県石巻市小船越
【設計監理】関・空間設計
【施　　主】河北町（現・石巻市）
　　ほか
【施　　工】日本国土開発ほか

４．講評

今回の応募作品数は総計 33 と昨年をやや下回った。特に小規模建築物部門への応募が 4 点と少なく、また入選作をみることができなかった。この点、小規模建築物部門への応募を喚起する何らかの方策が要請されるといえよう。

しかし東北地方の建築界が今回、特に低調だったというわけではないであろう。前回の応募数が前々回の 2 倍近い活況を呈したことの反動かと思われる。事実、今回の応募作品はどれも一定の水準を超えた力作ぞろいであった。積極的に応募された各位に、あらためて敬意を表する。

選考に当たっては、東北建築賞［作品賞］の趣旨をあらためて確認しつつ作業を進めた。作品賞である以上、スキルの水準は当然求められる。一方、東北地方の地域性に立脚するという東北建築賞［作品賞］の性格からして、作品選考においてこれを軽視することは本賞の存在意義にもかかわることであり、許されないであろう。当然のことながら選考は申吟を要する苦しいものとなった。選考委員会においては、以上にとどまらない多くの点を総合的に考慮した上で最終的な選考結果を得たのであった。

現地審査をはさんだ 2 度の選考過程を経て結論に至ったが、惜しくも受賞を逸した作品にも特筆すべき内容を備えたものがあった。次回以降も、さらに多くの方々が応募されることを心から期待する。

以下に入選作品について個別に講評を記す。これは現地審査に当たった選考委員が起こしたものを参考に、選考委員長が纏めたものである。

【作品賞】◇　**鶴岡アートフォーラム**

本作品において水準の高い安定した設計スキルが駆使されていることは多くの選考委員が一致するところであった。内外の空間の造形は巧みであり、またその密度も高い。この建築自体が優れたアートというべきであり、外周のほとんどがガラスで囲まれた幾何学立体は極めて現代的なシーンを創出している。アートを楽しみ、創造し、発表する場を市民に提供することに成功しているといえるだろう。

ただ寒冷地における建築としてガラスの用いられ方に疑問も呈された。また西面の冷房負荷についても懸念が残った。しかし一方で、ここにおけるガラスの使用法は周囲にひろがる歴史的環境を阻害することなく佇む景観上の効果、そして周囲と内部を視覚的に繋げる効果に大なるものがあり、この点において高い評価を得た。

また搬入経路と一般の動線が交錯する面もみられたが、使用実態から見て全体評価を下げるものではないと判断された。

以上を総合し、本作品は東北建築賞［作品賞］に十分に値するものと評価された。

【作品賞】**◇道の駅「上品の郷」**

道の駅には車からの視認性の良さとともに、地域色を伝える施設でもあることが要請されよう。地域の風景にどのように参加してゆくかが重要なテーマのひとつとなるが、本作品の設計者は、

ことさら地域色を表現しようと無理に造形を捻り出すのではなく、きわめて誠実に課題に取り組んでいる。

機能性・快適性の追求、建築構法の合理的選択、抽象的でシンプルな形態、といった現代建築の方法によりながら、上品山を背景とする周辺環境に十分配慮した魅力的で特徴ある地域景観を生み出している。また地場のスギ材を使用し、地元の技術で大きな空間を構成するなど、地域に立脚するその姿勢は高く評価される。

スギ材による格子構造と雲状の幕屋根との間のガラスの扱いなどにやや未消化の部分が見られるが、全体評価を下げるものではないと判断された。

以上を総合し、本作品は東北建築賞［作品賞］に十分に値するものと評価された。

【作品奨励賞】**◇秋田拠点センター　アルヴェ**

多雪地域にある地方都市の駅前に賑わいをもたらすべく建設された巨大な複合施設である。評価されたのはその中心となっているアトリウム空間である。多様なレベル構成をもつアトリウムは、そのユニークな架構体ともあいまって魅力ある立体的な大空間を創り出
している。それはこの施設に配された多様な空間を繋ぎかつ隔離する役割を果たすとともに、寒冷地での冬期における快適な空間を市民に提供している点が評価された。

またその構成は構造的な課題、特に施工面での困難を克服した成果でもあり、この点も特記される。

ただ板状の高層棟部分が周囲に比べて巨大なあまり街を二分してしまってはいないか、また、一点集中的にこのような巨大ビルが建つことが本当に街の発展に繋がるのか、疑念が示された。

以上を総合し、本作品は東北建築賞［作品奨励賞］に値するものと評価された。

第 26 回東北建築賞［作品賞］選考委員会

委員長　武澤 秀一　東北文化学園大学環境計画工学科
委　員　小林 淳　秋田県立大学建築環境システム科
最知 正芳　東北工業大学建築学科
田代 侃　東北工業大学建築学科
本江 正茂　宮城大学事業構想学部デザイン情報学科
千葉 政継　宮城大学事業構想学部デザイン情報学科
西野 敏信　東北工業大学建築学科
本間 義規　岩手県立大学盛岡短期大学部 生活科学科
前田 卓　（有）ｱﾄﾘｴﾀｱｸ一級建築士事務所
髙橋 敏　岩手県建築設計事務所協会
宮腰 直幸　八戸工業大学建築学科

【研究奨励賞部門】

選考委員長　月舘 敏栄

東北建築賞の研究奨励賞部門に久しぶりに１件の応募があり、去る２月２日に選考委員会を７人の選考委員と３人の委任状のもとで開催した。

応募論文は東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻博士課程後期に在学する西村公宏氏の「明治４０年代における東京帝国大学臨時建築掛の組織について」（2003 年６月発表）他２編である。本論文は、わが国の大学付属公開施設における最初期の施設である東京帝国大学理科大学付属臨海実験所の設計組織についての論文であり、他の２編も京都帝国大学理学部瀬戸臨海研究所水槽室の公開と東京文理科大学附属臨海実験所水族館の公開を論じたものである。社会や地域に開かれた学会・開かれた大学が求められている今日の魁となる大学施設とその建築に関わる組織の実像を明らかにした一連の研究は、高く評価できるとして推薦された成果である。

応募論文の研究成果について歴史意匠部会代表委員から補足説明を受けた後、研究奨励賞に値するか審査を行った。委任状も踏まえた主な意見は、開かれた大学の先駆的施設・建築組織のあり方を明らかにした研究成果として高く評価する一方で、東北地方との関わり、研究奨励賞対象者としての条件が課題として指摘された。前者の東北地方との関わりでは、論文の中で青森県青森市浅虫にある東北帝国大学理学部附属臨海実験所水族館を論じていることで了承した。後者の研究奨励賞対象者としての適正に関しては、「東北建築賞」候補募集要項・研究奨励賞選考方法内規と照らし合わせて議論したが、支部常議員会議に一任することとした。その理由は、応募者が４０代半ばの社会人ドクターであるために＜若手研究者および大学院生＞、＜研究発表時に４０歳未満＞の規定にそぐわないとの危惧である。

応募論文の研究成果は研究奨励賞として妥当と評価したが、生涯学習時代に相応しい応募規程に見直す時期にきている意見を添付することとした。

第 26 回東北建築賞［研究奨励賞］選考委員会

委員長　月舘 敏栄　八戸工業大学建築学科

委　員

源栄 正人　東北大学工学研究科
毛呂　眞　八戸工業大学建築学科
月永 洋一　八戸工業大学建築学科
山田 寛次　秋田県立大学 建築環境システム科
山田 大彦　東北大学工学研究科
会沢 浩平　第一建設工業㈱
志田 正男　東北工業大学建築学科
松井 壽則　日本大学工学部建築学科
石坂 公一　東北大学工学研究科
狩野 勝重　日本大学工学部建築学科
庄子 晃子　東北工業大学歴史意匠学科
三浦 秀一　東北芸術工科大学 デザイン工学部
松本 真一　秋田県立大学 建築環境システム科
宮腰 直幸　八戸工業大学建築学科